

戰時國民幼稚園

（七）奉公の念

倉橋惣三

軍神を崇めらるゝ方々を始め、護國英靈の貴き戦功を仰いで、その勇、その斷への驚嘆禁止難きを思ふと共に、更に崇高の敬意にうたれるものは、その奉公の一念である。不純なく、迷妄なく、ためらひなく、くもりなく、一切を奉公の一念に懸けて、専心精進の誠、これこそ、その勇を發し、その斷を生み、英雄として、しかも恭謙に、その任に死せしめた所以である。その人に如何の力あり、如何の徳あり、しても私心を以てして、いかでか此の果敢に到らしめ得ようや。挺身の勇、突進の斷、もさよりその人の性に基き、平素の修練に據るゝところあり、いふも、私心を以てして決して彼の從容あらしめるものではない。初めから奉公である。慮るゝところも奉公である。決するゝところも奉公である。奉公なるが故に私なく、私なきが故に勇、しかも自ら勇ませざる勇なるのである。身を愛せざるに非ず。家を思はざるにあらず。たゞ奉公の一念に傾倒没頭して一切私なし。尊崇すべきはその奉公の一念である。

奉公は功を求めず。功を求めざるが故に、その死地の輕重を意こしない。たゞ時に臨んで、一身を捧げ、全力を盡し、自ら己れを失ふを顧みない。顧みないといふよりも、初めから己れを忘れてゐる。敢て捨てるゝは、いふまい。私を捨て、公にのみ生きてゐるゝところに、盡して事を残すなきを願ひ、盡して己れを存せんことを忘る。一切これ公、萬事はその中に發し、その中に消ゆるのである。

日本人がその素質に於て、その教養に於て世界に如何なる優位を占むるやは問ふまい。比して誇るべきの有無も問ふまい。寧ろ、その點に於て、自ら想ひ、自ら顧みて、その足らざるを憂へ、その尚ほ進むべきを勵めば足るのである。たゞ、奉公の一念に到つて、日本人は、その一切の價値をこゝに懸けてゐる。他國人に無くして、我れのみにより得るもの、實に此の一點である。日本の奉公の一念、之れをいづくに求め、いづれを比するゝことが出来よう。之れ日本人獨自であると共に、日本人に獨自たらしめる。日本の國家的獨自があるのである。こゝに日本あり、日本人あり、日本人の勇あり、斷あり、一切の優があるのである。

奉公の一念へ。われらの幼きものゝ心を培はう。弱いものも之れによつて強者たらしめよう。賢ならざるものも之れによつて賢者たらしめよう。而して、奉公の念を養ふものは奉公の念のみである。お互も亦弱く、賢ならざるを知るけれども、奉公の一念を以て、國民の保育者たるを得るであらう。保育を以て奉公し得る前に、奉公の一念を以て辛うじて國民の保育者となり得んことを希はう。